

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

「私の父」

亀岡市立東輝中学校3年

柴山 幸



「うっとうしい。」「もう、どっか言って。」
つい、かっとなって親に言ってしまった。その後の気まずい雰囲気。やるせなさそうな父の顔。私には、このような経験があります。

思春期なら、誰もが一度は言ったことのある言葉でしょう。でも、逆に思春期であれこれ言われるのを嫌がる私であっても、最低限口を出さねばならない親の気持ちを考えたことは、今まで一度もありませんでした。

私が中学2年生の夏、部活動の卓球の試合を、父が初めて見に来てくれました。その時は、「後ろの応援席で父が見ている。」と考えるだけでとても緊張していました。しかし、そんな緊張の中で、いつもと違って心強い味方となってくれたのもまた、そんな父の存在でした。父の存在を背中に感じ、いつも以上に頑張れた気がしました。残念ながらその大会では思うような結果を残すことができず、悔しい思いをしました。そんな私に、「優勝した人よりも、少なくとも負けた幸の方が得るものは大きい。」と一番に慰めてくれたのも、父でした。父の言葉を聞いた私は、「次こそは優勝して、父に喜んでもらおう。」と決意し、自分の課題を見つけては練習に励んでいました。

そんな時、突然父が手足のしびれを訴えました。念のために病院に行くと、「頸椎症性脊髄症」と診断されました。この病気は、首の神経が圧迫されて、手足から全身が不自由になる病気です。いつも元気だった父がそのような病気になるなんて想像もしていなかったのも、私はとてもショックでした。しかし父は、「生まれつき小児麻痺だから、どのみちこうなることは予測していたよ。」と冷静でした。父は家族に心配させまいと、強い自分を見せてくれていたのだと思います。家での生活が困難になり、入院生活が始まりました。手足が動かなくなり、体も動かなくなってしまう父は、車いす生活になってしまいました。そんな父の姿を見て、「もう、普通の生活に戻れないのかな。」とか、「父が仕事に復帰できないと、私達の生活はどうなるのかな。」という不安が私の中にはありました。それと同時に、「もう、父は私が卓球をしている姿を見ることはできないのかな。」という不安もあり、父に私が優勝する姿を見てもらうことを諦めかけていました。しかし、諦めていたのは私だけでした。父は、私の卓球をしている姿が見たいという目標のために、リハビリを頑張っていました。

そんなある日、父が手術をすることになりました。強い心で回復を目指している父を見て、私も負けじと卓球を頑張りました。父にもう一度、卓球をしている私を見てもらうために。そして、父の手術の日。家族全員で待合室で待つこと7時間。無事に手術は成功。手術後も、父は厳しいリハビリに耐え、自分で体を動かすことができるまで回復しました。後に、父から聞いた話ですが、父は手術後すぐには回復せず、リハビリの先生に「こんなリハビリ無駄や。」と言ったことがあるそうです。しかし、父は周りの人の支えもあって、私との約束を思い出し、前よりも厳しいリハビリに耐えました。そんな父の姿から、私は「目標を達成する。」という強い思いがあれば、どんなことも成し遂げることができる。困難にぶつかった時、諦めてしまったら目標を達成することもできない。もし、困難にぶつかっても、周りに支えてくれる人がいれば、一緒に乗り越えていけることを学びました。

私の中で父はとても大きな存在となっています。「うっとうしい。」「放っておいてほしい。」と思うことも確かにあります。しかし、私のことを一番に考え、支えてくれるのも、間違いなく家族です。私はまだ、父との約束を果たせてはいません。しかし、この先どんな困難に直面しても、父のように決して諦めず、困難に立ち向かって行く強い人になりたい。そして、いつも支えてもらってばかりだったけれど、今度は私が誰かを支えられるようになりたい。いつも父が、私を支えてくれたように。